

第1回生涯学習審議会が出たキーワード

<参考1>

学び総論

尚利きの学び（知の深化・知の探索）
失敗の多い「知の探索」が重要

「知の探索」には社会との連携
※企業・NPOなど

年齢や対象で区別しない

譲れない価値をおく

主語は私たち・みんな

共生…生きるを共にする

学んだことを私物化しない=教え合う

ウェルビーイング=本人が納得できるような豊かさ

教育課程は20年/100年

VUCA時代=大人が示す生き方が通らない

対話→学びほぐし→新しい自分とみんなを発見

高齢者の活躍

高齢者を問題としない

課題解決が目的だと負担感が増す

高齢者もプライドを傷つけられたくない

自分や地域のために動ける50代~どう過ごすか

学ぶだけではなく生かす場が必要

自己理解を深めると学びたいことがみえる

多世代交流

子どもたちが希望を持てるよう大人が背中を見せる
（学ぶ姿・活躍する姿）

認め合う関係、うれしいたのしいわくわく

子どもと大人対話し子どもが自分の人生を考えていく

高齢者は子どものいうことはきく

理想の大人がいると探求学習も充実する

地域コミュニティ

自治区の担い手不足
→若手登用、地域に戻る人を増やす

まちづくりの捉えなおし
学びをキーに自治の復活

交流館+各拠点連携が必要

コミュニティと学び直し

社会的包摂・SDGs

講座等に出向けない人にも配慮を

具体的方策

生涯学習コーディネーター

若者・シニア起業塾

令和4年度第1回生涯学習審議会(8/8) 【概要版】

■ 牧野委員からの話題提供

- これまでの社会は、少子高齢化が問題であると捉えてきたが、対策を講じた結果改善されたとは言い難い。問題とみなすことをやめ、人生100年生きられる社会をつくってきたことを踏まえ、子どもたちが希望の持てる社会にするため、大人たちが次の世代に渡していくべきである。

<杉並区の事例>

- 杉並区教育ビジョンは、先が見通せない世の中であることを踏まえ、目指す教育などの目標設定型の作り方をやめた。「譲れない価値」を基本的な考え方として示し、主語を「私たち」とした。
- 「共生」について、“共に生きる”から“生きるを共にする”という解釈にした。
- 実行計画は別でつくるがビジョンは全国一短い。子どもたちを尊重しながら大人たちと対話することで子ども自身が自分の人生を考えていくことができる。

<転換期の社会>

- 大人が言っている通りに生きればよい時代ではなくなっている。自分たちが世界的な課題を引き受けなければいけない時代。
- 各省庁がコミュニティと学び直しを焦点化している。
- ウェルビーイング、本人が納得できるような豊かさを持つことが大事。すべてを平等に保障する時代から一人一人が関わっていく時代にしないと厳しいのではないか。

<地域コミュニティと教育改革>

- 今の学習指導要領は、探求の視点が入るなど世界最先端ともいえる内容になっている。しかし、教育課程は人生100年のうち20年程度であり、学校で学んだことの使いまわしではもたない。
- 学校と地域コミュニティが焦点化されている。学校で探求し、地域でも探求し、学びを深めて学校に戻っていく。学校で探求することを学びながら生涯の自分の意思を探究していくべき。

<社会の構造転換>

- 平均寿命が年々延びており、長い人生をどう生きるか問われる社会になっている。悪い社会かといえそうでもなく、子どもが死なない社会は世界的に珍しい。結果、少子化になっている。
- 現在は、子どもの手が離れる年齢は50歳頃。自分や社会のために時間を使える方が多くいる時代。その方たちがイキイキと過ごせる社会にしたい。
- 今の仕事は2030年に50%が自動化され、子どもは今ない仕事に就いているという論文がある。こうした時代では大人が子どもに将来を示すことが難しい。子どもが人生を作っていく時代。

<子どもに必要な相互承認と対話的学び>

- 相互承認の関係をどうつくっていくかが大事。社会的に良好な関係を持った人の方が長寿であるというデータがあり、独居でも友人とご飯を食べている人は介護リスクが減る。
- 厚労省の高齢者政策は、治療から社会的処方へ主観的な幸福感を重視する政策に変わってきている。終末期に幸せだったと思えるところまでが議論の対象になっている。

<みんなが主役の社会へ>

- 横浜市でマンションの自治会役員に当選した13歳の子どもがいる。大人が支えてあげながら一緒にやっていくことが必要。感染予防でマスク着用が義務づけられ、話すことが悪の時代。やっぱり対話をしなければならない。
- 「対話」→「学びほぐし」→「新しい自分とみんなを発見」こうした循環をつくっていくことが必要。自分が変わると社会が変ということが実感できるように。人生100年時代を生き抜く「学び続ける力」を子ども・若者・すべての世代に。

令和4年度第1回生涯学習審議会(8/8) 【概要版】

■各委員による意見交換（主なもの抜粋）

<学び総論>

- 「両利きの学び（知の深化と知の探索）」が必要。学校教育では失敗がほとんどない「知の深化」ばかり。VUCA時代においては、一見無駄に見えて失敗の多い「知の探索」をやっていく必要がある。そのためには、地域の企業・組織・NPO・NGOなどの多様な主体と連携していくことが必要。
- アクティブラーニングは、「主体的対話的な深い学びなど対話をしていくこと」と「能動的に関わること」の二つを絡めて深めていくことが問われている。教えるということも知識を伝えることだけでなく、探求して新しいものを発見していく喜びを身に付けていくことや教え合う関係が大事。
- ギガスクール構想では、一人一台タブレットが配備されているが、学校では格差が起きている。教え合うことを前提で学んだことを私物化しないことが必要。
- 「あなたが経験したことに関して満足をしているか」と聞くと数値が下がるが「あなたが経験したことは有意義だったと思うか」と聞くと数値が上がる傾向にある。日本の文化で自分をあまり高く評価してはいけないというような風潮がある。その意味でも幸せ感や肯定感のようなものを個人が獲得しづらいことあるため、互いの関係性を重視していく視点も必要。
- 年齢や対象でこれまではセグメントされてしまっているため、これからはどうつなげていくかが大切。

<地域コミュニティ>

- 自治区では、役員の担い手探しに苦労している。自身も再雇用での就職先が決まっていたが、頼み込まれて引き受けた。若い世代でも自治区の運営に携わることのできる体制を整えたいと感じる。
- 定年延長で地域に帰ってこない方が増え地域をどう維持していくか課題。ただ、小さなコミュニティでは互いの顔が見え、学び合っていくことがやりやすい地域ではある。合併以降、行政任せになっていることも改めてまちづくりのあり方を捉えなおすなど、そこに学びも増やしながらか子どもたちに背中を見せていくことができないか。
- 交流館は地域課題解決の拠点といわれるが自分たちだけでは荷が重い面も感じている。利用者の多くを占める高齢者は元気であることが一番。子どもとの関わりにおいては、中学生はとても忙しくて機会をつくっても集まらない。交流館だけではなく他の機関と連携が必要。

<多世代交流/子どもと大人>

- 大人が探求している姿を見ていないと、学校の中でいくら探求と言っても子どもに刺激されない。
- 多世代交流サロンとして地域の交流拠点を運営しているが、子どもがやることに対して高齢者は言うことを聞く。地域で幸せに暮らしていくには自分がこの地域の住民であるときちんと意識しないといけない。地域を盛り上げるというより私自身が楽しませてもらっている。子どもが関わると大人も変わる。
- 学校現場の経験として、子どもたちに任せるよりも大人がルールを敷いた方が早く実行ができるが、子どもに出番、役割、責任を与えることが大事。子どもの失敗には大人は寛容。

<社会的包摂・SDGs>

- 豊田市は土日にイベント等の企画を行っている印象が強いが、そこに出向けない子が存在しているため参加できない子にも目を向けてほしい。20代前半で仕事を辞めた方などと接しているが、様々なスキルや知識を持っている方が多い。高齢者の梅干しをつけるとか味噌を仕込むなどの暮らしの知恵を生かせるとうい。学校と障がい者施設や医療施設がつながり、学校に来られない子にも学べる場が提供されると良い。

令和4年度第1回生涯学習審議会(8/8) 【概要版】

<高齢者（予備軍含む）の活躍>

- 高齢者の活躍に関しては、課題を解決するために行うと負担感が生じて動かなくなるということがある。特に行政は地域課題の解決を目的にしがちであるが、最初は動くが途中から疲れてしまい動かなくなる。認め合う関係や楽しい嬉しいということにつながるような作り方が大事になるのではないか。
- 子どもたちと交流すると「楽しい、ありがとう、すごい」と言われ高齢者自身も自分のプライドを傷つけられず、子どもと関わる中で子どものことを大事に思い始めることがある。誰もが自分を認めて欲しいし、自分が生きてきた経験を否定されたくない。これは子どもも大人も同じでそこを互いが認め合える関係ができるとうい。
- 定年延長により企業が再雇用制度を改正検討しているが、大幅な給与減や業務変更（警備員等）が雇用条件となっている。豊田市では、バブル世代の会社員が約4万人働いており、製造業が大きな割合を占めている。今後、生きがい難民や予備軍がまちに溢れてくるのではという不安があるが、自己理解を深めると学びたいことがみえてくる。
- プロボノ活動を通じて学び続けるという兆しが見えてきている。例えば、製造業で働いていた方がとよた福祉大学受講後にNPOを立ち上げられた方もいる。学ぶだけでは自分を生かす場がないため、アウトプットの間が大切。自分を知り、生かせる場を探してそこに実践で飛び込んだ時にもっと学びたいと感ずるのかもしれない。
- 高齢者がドローンの操縦を覚えてそれを中学生に教えるプログラムでは、単に学ぶだけでなく、子どもたちに教えることでのアウトプットがあると学びが深まり自身の可能性も広がる。子どもにとっても「こんな大人になりたい」につながっていくと、子どもの探求学習にも効いてくる。
- シニアアカデミーは受講生の高齢化が課題。学んだことを地域に戻って還元するにも遅い年齢。現在の講座内容を見直す時期に来ている。

<推進体制>

- 生涯学習の所管は市民活躍支援であるが、「地域という社会の中で皆が学ぶ」ことについて考える所管がないような気がしている。
- 課同士の横のつながりを強化して縦割りを超えた体制が必要。

<具体的方策>

- 通信制ルネサンス高校と連携した福祉実習を実施しており、修了した生徒は福祉事業所で学びながらアルバイトをすることができる。普通科高校ともに接点があるが、生徒の質は変わらない。中学生のときに選択の格差があるのか気になる。学校教育ではできない学びを企業や福祉団体がどのような場で提供できるか議論したい。
- 生涯学習のコーディネーターの役割が必要ではないか。
- 多世代交流を促進するためのコーディネーター塾、中学生やシニアの起業塾など面白いことを誘発する学び場があるとよいのではないか。